【熊本県賞】

水とつながる将来

熊本県　氷川中学校　２年　開原（かいはら）　菜々子（ななこ）

「きれいな水だね。」私はおばあちゃんにそう言った。「山の水は、きれいでおいしいんだよ。」とおばあちゃんも言う。今の会話は、私が山の水、いわゆる「天然水」の存在を知った時のことである。

あの日から、私は水なんてどこからでも手に入る、当たり前と感じていた。水の大切さについて教わった時もあったが、水に困ったことがなかったため、実感なんて全然なかった。あの日まで。

「地震が発生しました。」テレビから、急にそんな文字が出てきた。と思った時には、家がガタガタと音をたて、揺れていた。とてつもなく強い揺れだった。父と母が、私と弟を庇った。揺れが収まったあと、一気に家の外から騒ぎ声がした。この地震も７年前のこと。誰も忘れることはないだろう、「熊本地震。」水の大切さを本当に感じたのは、この日だった。

あの時、幸い水は止まらずにすんだものの、母が「いつ水が止まるか分からないから。」ということで、水がでる内にポリタンクに溜めておき、山の天然水も取りに行った。「前もおばあちゃんと水を汲みにきたなぁ。」あの美しい水と、静かでのどかな山のことを思いだしていた。そして、その場所に着いたとき、私は前に見たのどかな光景とは別のものを見た。おばあちゃんと来たときにいた人の、倍は余裕でいた。すごい人混みだったんだ。

「どうしてこんなに人がいるの。皆も水道は機能しているはずなのに。」私は疑問に思った。私も水を汲みにきているが、私的にはお母さんもお父さんも大袈裟だなと思っていた。すると、「別に汲まなくてもいいじゃん。」とダダをこねる私より年下の男の子がいた。その時、その子のお母さんがこう言った。「水がないと人は生きていけないの。水道が止まったら、お水が飲めなくなっちゃう。水をちょっとしか溜めなかったら、すぐになくなっちゃう。」と、その時にやっと実感し、分かった。そうだ、人は水がないと生きていけない。それにトイレだって水がないと流せない。大好きな水遊びもできないんだ。

その日から、私は無意識に節水を心がけるようになった。あれから７年たった今も、私はおいしい水を飲めている。人々が水をあれから大切にしているからだ。私は、このままきれいで美しい水を繋いでいきたい。将来子供が生まれてからも。ずっと、次の世代まで。